

おたふくかぜが流行しています。

2014.09.29

函館近郊ではヘルパンギーナや手足口病といった夏風邪の流行が終わり、のどが痛い、頭が痛いという症状の風邪が小学校高学年の子を中心に流行中です。しかし、九月後半に入りおたふくかぜが流行してきています。

おたふくかぜは、おたふくかぜウイルスによる感染症で、2ないし3週間の潜伏期の後で、耳下腺という耳の下のところにある腺が腫れてくるという病気です。通常は、両方の耳下腺が腫れますが、片方が腫れてからもう片方が腫れるという時間差があるものなども経験します。発熱はする人やしない人もいます。耳下腺が腫れる病気はおたふくかぜ以外にもたくさんあって、流行期以外で採血することなく診断することはとても難しいです。

合併症としては、無菌性髄膜炎が50人に一人程度、ごくまれに睇炎や睾丸炎、卵巣炎が起こることがあります。おたふくの後に頭痛や吐き気を訴えるときは、医療機関を受診してください。一番心配なのは、罹ってしまうと治らない高度難聴が500ないし1000人に一人の割合で起こることです。耳下腺が腫れてから4週間目までに発症することが多く、1歳2歳では気づかずに過ごしている場合もあるかもしれません。ですので、おたふくといわれた後は少なくとも1か月程度は小さな音が左右でしっかりと聞こえていることを確かめるようにしてください。

予防はワクチン以外にはありません。現在では1歳を過ぎてすぐと、2ないし4年後にもう一度の計2回が推奨されています。予防接種料金は各医療機関によって5異なりますが5千円程度かと思います。接種を忘れないように、定期接種となっているMRワクチンと一緒に同時接種がおすすめです。10月からは水痘のワクチンが定期接種となり無料で受けることができるようになりますので、その分の余裕をおたふくの予防に向けてください。

予防できる病気はワクチンで予防する、それが小児科医の願いです。